

Title	隨筆北京(奥野信太郎著, 第一書房發行)
Sub Title	
Author	竹田, 龍兒(Takeda, Ryuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.2 (1940. 9) ,p.176(378)- 177(379)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400900-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。世界の隅々より蒐集せる過去、現在にわたつての豊富な資料を背景に、一貫せる著者の見地が展開される。そこには例證なき假説は一も無く、あまりに多量の内容を壓縮せるため、卒讀よりは精讀によつて、はじめて理解せらるべく、かくて豊富な示唆を與へられるであらう。

本譯書は卷頭に詳細な解題を附して、原著者の學的地位を地理學史の上に明かにし、譯文も、いづれかといへば難解なる原著をよく消化して理解し易く努められた苦心の跡を察することができ。本書の全譯は、かつて昭和八年に山口貞夫氏によりて『ブライシユ人文地理學』なる題下に古今書院より刊行せられてゐるが、いま飯塚氏の譯書と比較するならば、部分的に見た範圍内であるが、誤譯が多い。ブライシユの本書に就いては決定的に今回の譯書を推薦すべきである。下巻が速かに完成せられんことを待ちつつ、紹介の筆をとゞめる。(平山榮一)

隨 筆 北 京 (奥野信太郎著 第一書房發行)

從來北京の風物を世に紹介した文章は必ずしも尠しとしないけれども、專著の形に於て纏まつたものを擧げるとなれば纔に中野江漢氏の「北京繁昌記」三冊(大正十一年—十四年)、村上知行氏著「北京」(昭和九年)、石橋丑雄氏著「北京遊覽案内」(昭和十一年)、林富喜子夫人著「古金欄」(昭和十四年)等を數へ得るに過ぎない。然もその或ものは既に内容に可成りの改訂を必要とするものであり、又或ものは觀光客相手の片々たるガイド・ブックの

類であるなど、吾人の欲求を滿すに足るものは甚だ求め難い有様であつたが此度「隨筆北京」の刊行を見るに及んで筆者多年の渴望は漸くにして醫せらるゝを得た感が深い。

本書は、現在わが慶應義塾文學部に於て支那文學を講じて居られる著者が、昭和十一年より十三年に至る二ヶ年間の北京遊學より歸られて後、求めらるゝ儘に思ひ出の北京生活を語られた記念すべき一卷である。遊學半にして盧溝橋事件の勃發をみ、世紀の一大轉換期を彼地に過された事は今にして思へば千載一遇の機會に恵まれたといふべく、また事變を契機として急激な變貌を示しつつある古都北京のありし日の閑雅な情趣に心適くまで浸るを得られたのも「隨筆北京」を世に送らんが爲の天の優寵と考ふべきではなからうか。收むる所總て二十篇の中、直接事變を描いたものは「その前夜」「籠城前後」「北京籠城回想記」の三篇である。既に一觸即發の危機を傳へられてゐた事變の直前に於てすら北京は存外平穩だつた事が語られてゐる。著者は事變の性質だとか前途だとかに關して、議論めいた所見などは一切述べず、専ら身邊の出來事をルポルタージュ風に寫された事が却て實感を盛り來つてゐる。次に味覺の世界を描いた「燕京食譜」と「小吃の記」の二篇は讀者をして文字通り垂涎に堪えざるを覺えしめる。北京の宴席料理の豪華を説く人はあつても、家常飯や小吃の食味を説き得たものは他にその例を聞かない。代用食の強調せられつつある現下の我國に餃子・燒餅・拷花捲兒・炒醬麵の類を紹介すれば必ずや喜ばれるに相違なからう。著者も言はれる如く北京は天下の食味を中心であると同時に演劇の中心でもあり、北京人士の芝居

好きは實に想像以上である。わが慶應義塾出身者中には古くは辻
 聽花氏、近くは中丸平一郎氏など戲迷の多いのもまた奇とすべ
 く、著者もその一人たるは改めて言ふまでもない。「演劇の二道
 場」「陸素娟のこと」「三國志演義を中心として」の三者は北京劇
 壇の傾向と近狀を傳へ、併せて支那劇に對する著者の並々ならぬ
 愛着と造詣とを窺はしむるに足るものである。「女人剪影録」「冰
 心型と白薇型」「文學地圖の一隅」の諸篇に於てはその近代女流
 文學への關心が特に注目せられる。丁玲・石評梅・盧隱・謝冰心
 等を生んだ時代の思想的及び社會的背景を説き、或は彼女等の數
 奇な生涯を語つては事變の遠因にまで觸れて居られる。その他
 「支那の知識人」「支那人のこゝろ」をはじめ爾餘の諸篇はみなそ
 れ／＼に示唆に富んだ文章として尊重すべく、複雑な支那民族性
 の實體を究めて將來の對支文化工作に處する心構へを説くなど、
 吾人の蒙を啓き、在來の所謂支那通によつて誤らされた支那への
 認識を是正するに與つて力がある。

要之、本書は豊かな教養と高雅な趣味性と繊細な感覺を以て記
 された北京への理解と愛情の書である。支那の文化がかくも正當
 に評價された事は曾て無かつたであらう。最後に著者は本書をも
 のするに當つて殊更に「潑刺とした面に觸れようとしなかつた」
 旨を述べて居られる。こゝに本書の一特色が見られるだけに一部
 の讀者には餘りに著者の趣味に偏し過ぎたかの憾を懷せることも
 有り得るだらう。著者の意圖を無視する非禮を顧みず敢て一二希
 望を申述べる事を許されるならば、近代都市としての北京の性格
 や北京の手工業等についても麗筆を振つて頂きたかつた。寛容な

る著者が筆者の愚なる願ひをも許容されて「續北京隨筆」を矢繼
 ぎ早に世に送られん事を切望して已まない。(竹田龍兒)

寄贈交換圖書雜誌目錄

- | | |
|---------------------|-----------|
| 東洋思想研究 六、七、八、九、十 | 東洋思想研究所 |
| 相武研究 二二、二三、二四、九〇六、七 | 武相考古會 |
| 龍谷史壇 二四、二五 | 龍谷大學史學會 |
| 歴史と國文學 二二〇三、四、五、六 | 太 洋 社 |
| 歴史と生活 三〇二、三 | 經濟史學會 |
| 基督教史研究 七、八 | 基督教史研究會 |
| ヂョーヂ四世と内閣 | 松 本 馨 |
| インド國民 二 | インド文化研究會 |
| 國學院大學講話集 十 | 國學院大學 |
| 勢陽論叢 三 | 神宮皇學館研究室 |
| 商業と經濟 二〇ノ二 | 長崎高商研究館 |
| 建國大學創立紀念第一回講演集 | 建國大學研究院 |
| 法經會論叢 八 | 北大法經會 |
| 郷土と美術 一三 | 龍 燈 社 |
| 佛教研究 四ノ二 | 佛教研究會 |
| 同願期刊 第二、三期目錄 | 佛教同願會 |
| 奥羽史料調査部研究報告 二 | 奥羽史料調査部 |
| Dietsu 八ノ五 | 大藏出版社 |
| 東洋文庫朝鮮本分類目錄 | 東 洋 文 庫 |
| 書滲 一六 | 北京近代科學圖書館 |